

真 生

第 三 卷 七 月 號

△宗教は決して遠い世界の飾物でなく、現實の活事實でなくてはならぬ。(尅)

□永遠の生命に生き無限に向上しやうといふものが、何うして人間一生涯の生活で萬事終るゝの考へがあり得やう。乍然眞に道に生きやうとする人々の本心の要求は、一以て貫く宇宙の大道の中に、全身をこめたる眞剣があるのみである。

□「あすありと思ふ心のあだ櫻、よはにあらしの吹かぬものは」の古人の詠歌は、直に吾人の今日の生活の上にも充分に味ふ可き言葉ではないか。少くとも眞に生き眞に立たうと自らに心する人々は寸刻の時間と雖も爲す所なくして生きやうものではない。

□「昨日も徒に暮れぬ、今日も亦徒に暮れなんどす、一度過ぎて又と歸らぬ今日の一日、嗚呼我何を爲すべきぞや」と之は單なる古人の言葉ではない。眞に自らの人生を直觀し、眞に自らを生きんとするものゝ、一日一日として忘れてよい所の言葉ではない。

□「十有三春秋、逝くものは水の如し」と歎じた、彼山陽は己に逝いて今日の人ではないが。一度も之を吾人の今日の心に當はめる時誰か此の言の眞なるをこばむものがあり得やう。

□オウ人はパンのみにて生きるものにあらず。悠久たる天地の間我等何を爲すべきぞや、日々夜々に過ぎ行く人生の行路吾人は如何に生きべきであるか。道を求め、道に生き眞に悔いない眞人の生活を求むるものよ、我等はすべてに眞剣であらねばならぬではないか。(念) 六月八日午後〇時半

眞生

……(剋子)……

◆ 眞實の宗教	◆ 道の本源に歸れ	◆ 北越より二三	◆ 眞劔な心から二三	◆ 至誠心に就て反省二三	◆ 罪惡に對する考察
念阿彌	寛子	原吉郎	撫象子	土屋觀道	子
吾朋使り					

△「どんな人にも一つ宛の仕事が授けられてゐます、そして又其仕事は必ず爲し遂げられるやうに出来てゐる、だから私共はひたすらに其與へられてゐる道を亘て彼岸に達すれば善いのである、それが宗教でありそれ以外に何物もない」△如來は斯く總ての人に道を與へて置いて一顰一心正念にしまし來る、我れよく汝を護らむ」△手を執らんばかりに心を寄せてみえる、それを多く人々は知らずに、佛の救ひを乞ふて遠い世界にばかり轉がつてゐるもので、兎も吾々の與かれる處でない、寧ろ我々は全く佛から見放され捨てられ切てゐる代物だと思つてゐる。そして救ひと云へば特別な潮流にでも乗る事やうにばかり想像して、早く救ひに入りたいものだなど願ひたり、或は救ひになんか入らなくとも充分此儘で結構だと濟してゐる。而し救ひとはそんな特別なものでもなく又付うでも善い式のものでもない。

△如來さまは其塵人の心事を見透して「早く來い早く來い、お前の立てゐる其道を眞直に來い」とやる瀾なく呼んでみえろ。而し耳聾し眼眩んでゐる者には少しも聞えぬ。本當に痛ましき事だ。

△私どもも立てゐる其足元が正覺道だどんな人からでも如來さまのお蔭元へ達せられるやうに一本の白道が惹かれてゐるそれが何より救はれてゐる證據だ、その道を歩き初めるに當て佛に歸命する南無の生活が據てはならぬ。そして佛の勵ましと増長とに由て其菩薩道を究竟してゆく事が出来る。茶碗を賣る人にも、車を曳く人にも、繪を描く人にも、政治を行ふ人にも、夫れ夫れ菩提道がある。

△宗教は決して遠い世界の飾物でなく、現實の活事實でなくてはならぬ。(剋)

至誠心に就ての反省(二)

土屋 觀道

私共は以上の至誠心について更に反省する所があらねばならぬ。それは宗教を以つて純感情的のものであるといひ、理智的のものでないといふ人があることである。乍然之は一の誤まりであつて、それは宗教の本質が人類理想の中心生命であることを知らないからである。本來宗教の生命は人類生活の中心理想であつて、眞善美聖の根本人格の中心である。即ち智慧と感情と意志との融合致點としての理想生命であつて、いはゞ智情意の根底から全人格の躍動であるといはねばならぬ。

然に世の人々は往々にして眞の宗教を知らず、單なる一種の感情に捕はれて徒らに現實を忘れて、未來を願ひ、ともすれば共存の意義をも解せず、人類生活の中心理想たる人格向上の根本をも無視するに至るが如きは寧ろ誤解の甚いものと云はねばならぬ。此の意味に於て善導大師の念佛の三心に就ての解釋は正に人類生活の根本要求を示明されものといはねばならぬ。而も至誠心を以て眞實心であると解せられ、其の眞實心とは自己及一切の衆生をして、一切の諸佛諸菩薩に等からしめんとするの心であると觀破せられた一點の如き人類生活の根本要求たる永遠の生命と無限の向上とを此の土に實現せんとする要求であるといはねばならぬ。従て一切の菩薩が一切の惡を廢し善を修せんとするその如くに我も亦爲したいとの心が即ち眞實心であるといふことは所謂單なる感情的のものでないことは自から明かである。而て是の心の要求が所謂多くの樂天主義や、生天思想と其の趣きを異にする所以であつて、そ

こに所謂人格主義的理想實現の要求を離れない一大佛教の慈悲の眞髓が展開されてゐるのである。

従て淨土教に於ける往生思想が此の世を厭ふと云ふことは單に此土を厭ふて淨土を欣ぶと云ふのではなく、其の間往生思想の中には再び此土に歸り來りて、一切の衆生を其の苦から救はうとするの大慈悲心が一層痛切に現はれてゐるのである。否此の事は現に善導の禮讚等を拜すれば己に往生そのものが單なる自己一人の往生の爲めでなくして、一切の衆生と共に往生極樂の願ひである。即ち「願くば此の功德を以て平等一切に施し、同く菩提心を發して安樂國に往生せん」と願へる願文の如き、如何に導師が此の身を慈光宣傳に献げていらせられたかを知る可きである。

然にともすれば所謂多くの淨土教徒は此の先覺の深意も知らず、又眞實佛教の人格主義的本義をも忘れて、只徒に五感肉慾の感情的安樂を貪はり、而も亦單なる死後の解脱にのみ一生を樂まうとするが如きは寧ろ佛教を毒するものといはねばならぬ。

更に人格主義と云ふことをある人々は佛教は超人格の宗教である、殊に淨土教の特長は科學、哲學を超越するところにある。況んや政治だの道德だのとそんな形而下の小さな問題ではないのであると。乍然斯る考へは未だ一を知つて二を知らないもの、考へに過ないものであつて、眞に宗教の何者たるかを知つた人々の言ふべき言ではない。宗教が科學でないことや、哲學でないことは勿論である。又宗教が政治でなく道德でないことももとよりである。乍然人類の生活が科學や哲學と矛盾して満足しうるものでない限り、私共の宗教生活が時代の科學や哲學と矛盾して成立するものであり得やうか。従つて又私共の宗教信仰の内容が時代の政治道德と相矛盾して立つ可きものでないことも無論である。即ち既成の

宗教は一面常に今日の科學哲學によつて現實生活に内應すべく一致せられねばならないものであつて若し私共の信仰の内容に於て今日の科學若し哲學と矛盾するものがある時は其の一致せない部分のみは常に新たな科學と哲學とによつて一致すべく改變せられねばならぬものである。故に今日の科學哲學は此の意味に於てむしろ眞實の宗教を常に新生の世界に進展向上せしめて行く所のものとして眞實の宗教と相入れない所のものではない。從て私共が舊來の既成宗教の中に内在せる科學若し哲學思想が今日の進歩せる科學哲學と相一致せないものがある時には此の誤まつた諸種の點に於て吾人が眞實の反省改造を促さうとすることは當然なことである。從て宗教信仰の問題が今日の科學哲學と相關係して來るといふことは又當然のことではないか。而も政治道德の思想の如き社會問題として之を論ずるは私共の人類生活が社會國家を離れて生存することの出来ない限りもとより當然のこと、云はねばならぬ。從て如何に人類の生活をして意義あらしめ、又價值あらしめるかといふ點に於て、少くとも人類の幸福、人類の向上を眞實に考察するもの、到底没却せらるべきものではない。而も吾人は人類の一員として眞に目醒むる時、又國家の一員であり、社會の一員であり、一家の一員である。隨て眞に人生の眞義に目醒めた人々は無意識の中にも、人類生活の向上發展の中には社會問題、國家問題としても、政治經濟道德等の一切が如來中心の立場よりは等に對する眞實改善の第一歩として、出づ可きは宗教生活の進歩として、正に來るべき當然のことである。然に私共が仰の立場より今日の政治道德社會經濟等を論ずるを見て單なる政治屋、若し物質主義者の社會主義かの如くに見やうとする人々のある事は寧ろ悲しむ現象である凡そ世界の人類に於て、少くとも少しく人類生活の眞義に目醒めた人々に於て誰か今日の社會問題に

無關心な人々があり得やう。否現に昔に於ても釋迦孔子キリストの如き眞人に於て一人として其の一生を社會生活の改善、政治、道德の改造に其の身を献げなかつた人々があるであらうか。未だそれらは私共の嘗て聞かない所ではないか。況や宗教を以て超道德のものとして、人類の道德的生活を無視し、或は之を以て得々たるが如き人々のあるに至つては寧ろ其の愚や及ぶべからずである。而も宗教に於ける超倫理と云ふことは所謂たゞ倫理の世界を超越してゐるといふ意味であつて、決して倫理を無視するといふの意味ではない。又超道德といふことは、決して倫理道德、若し政治、經濟、或は科學、哲學、藝術等のである。從て宗教の超越といふことは、決して倫理道德、若し政治、經濟、或は科學、藝術等に至るまで一として、之等を無視すると云ふのではなく、寧ろ之等を抱擁し、更らに夫れをも越えたる宇宙唯一の絶對に歸命するところ、そこに所謂念佛の宗教的妙諦の輝くを見るのである。從て一度この念佛の光りに觸れたものは再び此の光の中より此世に處する人生の生活は皆悉く是等を抱擁した大悲中心の活動として現はれて來るのである。否、寧此の理想實現の意味に於て眞に宗教に徹した人々にこそ眞の科學も哲學も、或は政治經濟、藝術道德に至るまで、初めて必要缺くべからざるものとなる來るではないか。而も宗教と道德との關係の如き其の最も大なるものの一つである。佛教の涅槃といひ、成佛といふことも、畢竟人類生活の最高理想を外にして何があらうぞ。而て人格主義といふ言葉が斯る意味に於て人類生活の理想の中心を示す言葉として人格主義と言はれるといふことは最もふさはしい言表はし方と言ふべきではないか。

而も支那の善導大師が至誠心を以て之を示し、又之を以て眞實心であるとなし、其眞實心とは偽なら

ぬ心であつて、諸佛菩薩が一切の諸惡を制捨し、一切の諸善を勤修し給ふが如く我も亦之に等からんとするの心であると教へられたのは實に吾人の人格中心の最高理想を示されたものであると言はねばならぬ。而も此の眞實の理想なくしては淨土に往生したくとも其の眞の理想が成立せないのではないか。

靜に思へば諸佛といひ諸菩薩といふも其の内容から之を云へば所謂人格ある行爲の完成者若は其の行爲の實行者を云ふのであつて、成佛といひ、解脱といひ、涅槃といふも、要は其の解脱の境地をいふか或は其の境地に達した人について云ふのであつて、佛教の解脱涅槃の境涯は決して單なる五慾安穩の快樂主義や生天主義を云ふのではない。そこにはどこまでも、眞實の自由と正義と慈愛との積極的人格主義の上に立つ處の生活を云ふのである。而も此の事は主として、釋尊自身の内證と釋尊自身の化他的活動の上に於て一層其の眞實を見るのである。而て夫が釋尊の人格でなくして何であらう。之亦私が淨土教の根本思想を人格中心の思想運動であると言ふ所以であつて、此の人格を外にして眞の佛教はないのである。

從つて價值なき生活が何で人生の眞意義であらう。之亦念佛に至誠心の必要なる所以である。而も私共の行爲を反省して、其の是非を批判し得るといふことも此の至誠心のあるからではないか。若し私共に此の心が無かつたならば何によつて自分の行爲が正しいか正しくないかを批判することができ得やう否批判どころではない恐くは自ら之を反省するの心さへ起ることは出來ないものではないか。從つて私共に深い求道の心が起らないのも主として此の心の缺くる所から來るのではある。(六・一七)

眞劍なる心から(二)

撫象子

「かうは云ふものゝ私なども言葉が無難作に使用しますので誠に恥かしい次第ですが、まあお嫌でなければ少し斗り私の所信をお聴き下さいませ。」

一體宗教の眞諦は救に終るに非らずして救から始まる處の其價值實現の日常生活に即して居らねばならぬので御座います。是を今少しく専門的に申しますれば、一切の社會的存在は結局價值範疇の中の最高價值たる人格價值に歸納され統一されるものでなくては幻滅をまぬかれぬものである事は最早定説なのでから申上げる迄の事でもありませんが。私達は此人生觀上の根本原理を直に宗教と見たいのであります。此根本原理の上に日常生活が営まれるのが信仰の生活だと思ひたいのであります。かう申上げますと或は宗教の定義に關する理解に御疑念が湧くかも知れませんが、どうぞ問題を區分して御考へ下さいませ。私は今ま宗教の定義なぞと云ふ様な事は問題にし

て居ません。唯だ私達と宗教との關係を見たいので御座います。で私達の日常生活が單に私達自らの人格價值を中心として營まれなくては本當の満足はあり得ない。此自力的要求が他力的信仰に依らなければ容易に満たされない。否な他力的信仰に依つてのみ私達の最高理想が實現される事を力強く申し上げたいので御座います。理想は高いけれども事實が伴はないと云ふ憾みは多く人々に依つて耳痛くなる迄言はれて居りますけれども香世子様此人格的價值實現の要求即ち私達自らの本質的満足を望む心は實に絶望だと云つてすまして居れない止むに止まれぬ人類の要求であるので此處に宗教的動機があり而して多くの宗教的天才の方々の求道的苦悶があつたのだと存じます。實際私達の理想は言葉は成程人格的價值等と云ふものゝ、其内容に入つて考ふれば随分手前勝手な自己中心から來てゐる實には非人格的な反價値的なものであるかも知れませんが、自己を如實に反省し得る人である限り誠に及びもつかぬ事として絶望せざるを得ないのであります。然かも止むに止まれ

ぬ全心全靈の要求を如何にせんやです。噫、人生も亦たつらい哉ではありませんか。」

「奥様。私の望みも私の悩みも畢竟夫れなので御座います。私。ごうしたらいいでせうね。奥様」
「本當に私の身にも覚えがありますので御同情申しますわ。然しね。香世子様。静かに静かに冥想して下さいませ。而して私の申上げる簡単な言葉を單なる安價な説明と聞かないで眞剣に我が生命の深い深い關係を辿るのだと思つて静かに静かに辿つて下さいませ。香世子様。貴女は此宇宙に充ち満てる絶對人格愛とでも云ふ可き或者を御認めになられませうか。太陽の光と熱、空氣の新鮮と水の清冷と、或は山川草木の美或は私達の衣食住の其一々の微細の點に至る迄、到底人力の及ばない自然の恩恵があります。それは私達人間の生きる爲めに必要な物であります。云ひ換れば生きる爲めにこそ其等が存在されて居ると知り感じ思ふ時、其遍照の愛を感じ得せずに居られませうか。無論こんな事は多くの宗教家が云ひ古して居る事ではありませうが上りの説明としての單なる智的

理解でなく情意の上の感じとか覺とか然う云ふ自分の生きる上の情操が自覺的事實として私達の上に現はれて居るかどうかが之が問題の分岐點だと存じます。實際私自身に力はなく共、常に其遍照の大愛の中に育まれつゝありと云ふ純にして而かも固い自覺的感情は力なきに力を得、富まざるに富む處の源泉ではありませんまいか。どんな憂き事もどんな愁しき事も此の感情の中にはスツカリ融和され盡くして仕舞ます。私達は經濟も道德も科學も哲學も社交も人情も一切萬事唯だ神に迄如來様に迄崇む可き爲めの補助的價値に變換されねばどうしたつて落付かれませんか。先に申し上げました最高範疇たる人格價格も其奥底を今一つ衝けば如來様なる絶對價値に行かねばなりません。私達の絶對價値は實に如來様です。大神様です。而して私達の望む最高人格價値も歸する處は如來様なる絶對價値を我身に實現せんとする精神運動の中に見出されるのでせう。然らば香世子様。私達が本當に生きやうとするには私達の日常生活が何を中心として營まれて居るかを反省せねばならぬと

思ひます。男子と云はず婦人と云はず私達は唯だ私達自身と及び家族との身體の生きて行く事に就てのみ考慮して居ます。而して社會人として唯だ他の人から悪く云はれまい出来るならばよく見止められたいと云ふ事に焦慮致します。かくの如くして一日が過ぎ一年が過ぎ一生が過ぎて行きますおいしい食物ややわらかな著物や文化的な部屋やさう云ふ物が何を中心として望まれ或は與へられであるか。もつとハツキリ申しますならば私達の永遠の生命なる人格の完成に關して夫がどれだけ價値を現はして居るかを省みずして私達の大切な一日一日が費されて居りますならば夫は大變間違つて居ります。然し私達は夫等を否定するのではありません。唯だ夫が單に身體の贅澤や生命の費えに終つて仕舞ひたくないと云ふ事でありませう。いつやらの蠟燭の御話を思ひます。本當に私の生命の蠟燭の燃え切らぬ内に眞剣に求め眞剣に充實したいと存じますわ。私本當に此事を思つては獨で泣いて居ります。凡て何事でもですが「其御心が尊いと存じます。凡て何事でもですが

わけても信仰は體驗でなければ駄目ですのに、とすると聞く丈に終らうとして居るは悲しい事だと存じます。夫は畢竟眞劍の求道心が足りないからではないでせうか。此意味一つ丈でも貴女の其純な眞面目さには心から敬服して居ります。眞劍に御求めなさいませ。眞劍な求道心なしに何の喜びが信仰がありませう。眞劍の修養體現なしに何の満足がありませう。實際自らが本當に生きるか生き得ないかの瀬戸際ですもの！」
「御話を承つて居りますと身が引締る様な感が致します。ほんとにモウ命を捨てても惜しくない程に迄切つまつてきました。」
「さ。其處です。今貴女の其純な熱烈な求道心を轉じて見えざる宇宙唯一の如來様に其眞劍さを持つて祈りに祈つて祈り切つて下さる可きであります。其至心の願ひの心に必ず感應道交する或る宗教的操を體驗するでありませう。此のインスピレーションは貴女を感激せしめて眞實なる更生の事實を認識なさいますでせう。今迄の概念的な

見えざる力は此時感激の上に大慈悲として大きな抱擁の愛を直觀し而して歡喜の涙にくれるでせう。かくて今後の貴女の一生は本當に光明輝き花香薫するエデンの樂園と變化するでせう。茲に歡喜と伴なる努力精進の生活、理想體現の生活、救より初まる眞實新生が行はれますでせう。お、如來様よ。私は今眞劍に眞實の言葉を持つて祈ります。どうかあなたの御名の下に此可憐な而して純眞な一人子を喜びによみがへらしめ賜はん事を………暫く沈黙の後、靜に而して低い乍らも力の籠つた聲で如來の御名が香世子の心の底に一つ宛ハツキリと響いた。

すると香世子の口からも何時の間にか御名が呼ばれて居る、見る見る内に白玉が眞珠か非らず非らず唯だ純眞な涙の露が眼瞼の上に輝めき而して止めどもなく美しき頬を濡らすのである。………噫々回心の第一歩夫はやがて生治の第一歩なのだ。噫々眞劍な心からこそ………

(完)………

北越より

原 吉 郎

而して大正四年春極樂寺様の勧誘に依り同寺に於ける故増上寺御門主堀尾貫務老上人の五重相傳を受けました。此時は總てを忘れて熱心に聽聞もし勤行も致しました。同大正四年夏期當地佛教青年會主催講習會が淨土寺に開催されました。一週間聽講致しました。此時辨榮上人に始めて拜謁大靈の光に付て御講話がありました。故中島上人及貴上人にも確か此年か前年か矢張淨土寺で夏季講習の際御話を拜聽致しました様に思ひますが、何年でありましたろうか。翌大正五年四月極樂寺に於て親敷辨榮上人の教化を受けました。御上人は私一人の爲めに長時間に亘り特に「釋尊出世之本懷及本迹不二之讚」に付て御話がありました。非常に難有感しました。同年六月二十日茲に如來の風寵に依り機縁醇熟して極樂寺に於て親敷貴上人の御教化を蒙るを得ました。四五の人々と共に

熱烈火の如き貴師の信仰座談を拜聽し各自の發する愚問難問に對して一々懇切丁寧に或ひは卑近の例を舉げ或は圖解を以て御指導下さいまして一同誠に難有感じたのであります。翌廿一日再び御勸化を蒙つたのであります。此時少數薄明かりがして來たのであります。歸途同寺門前にて特に鐵道線路を踏切らんとする時、下り急行列車の警笛を聞ける一刹那天地洞然萬物生々として輝き全く別天地の開けたる感あり、身心共に輕く恰かも空を行くが如き思にて無意識に歸宅し、快言ふべからず、同夜夢に彌陀觀音の二尊を拜し又た自然に「焚く程は風が持て來る落ち葉かな」なる俳句を意識し、歡喜名狀すべからず、未明に蹶起して家人に談りて此喜びを分ち早朝極樂寺へ參りて貴上人に拜謁昨來歡喜の状況を詳細泣て具陳し且つ感謝の意を捧げしに貴上人も共々御喜び下さいました。入信の印可を與へられ、大に前途を祝福せられました。噫々生れて四拾參年未だ會て如此歡喜に充ちたる精神状態になり得るとは殆んど想像も及ばなかつたのであります。茲に始めて大なる満足

を得たのであります。過去永年の生活は順逆共に皆是れ如來の大なる恩寵たりしを痛感せられ、今やしみじみと其難有さが味はれて胸が一ぱいになつて泣かざらんと欲すも能はなかつたのであります。漸愧と、感謝と、歡喜と、敬慕と心の中は大變だつたのであります。嗚呼今想ひ出しても分明に當時の光景が感ぜらるゝのであります。其後益貴師並に辨榮上人様の御懇切なる御教導に依りまして信仰も段々進んだ様にも思はれ随分平生の精神状態も生活様式も餘程向上した様でありましたが、翌大正六年五月(寺内内閣の時)衆議院議員の改選に際し親しき友人の爲めに(友人は内閣反對派の候補たりしたため)聊か奔走盡力せる結果目的は達しましたが、遂に選舉法違反の名目の元に六月中旬四五日間未決監に囚れの身となりました事件は罰金刑で済みましたが、茲處でも一寸煩悶しやうとしましたが幸ひに兼ての御教に依り大に信仰の威力を發揮致しました。今日想ひ出しても痛快であります。爾來幾年益兩御上人の御懇篤なる御教化を蒙り比較的平安なる生活裡に充分に

如來の大慈恩を味はさして載て居りますが、乍併割合に進歩致しませんが、自分ながら物足らぬ感じがし、時に愛想が盡きる事があります。先年辨榮上人の御遷化と言ひ近くは慈母の死亡と言ひ其他日々之世相一として大なる刺撃たらざるなく佛説不慮親敷く如來の御說法を見聞しながら猶且つ日々の生温き生活よ。噫々 時に熱血の沸き返る様の事もありますが、もうも永續がせんのであります。冷靜に事物を観察する事は出来ませんが、もうも熱が足らぬのであります。信仰も理智的には進む様であります、熱の足らぬ爲めに、行の上に現はる力が足りません。何分利他的行爲に於て甚だ不充なるを感ずるのであります。竟畢御念佛の足らぬ爲めでありましやうか。母は身神共に洵に平安に唱名しつゝ此世を去りました。此點御安神下さい。勿論母の往生極樂を疑ひません。乍去私としては母を極樂へ往生させるも地獄へ落すも一に今後の私の責任であると感じて居ります。母の純愛を通じて三世十方一切の諸佛諸菩薩を我が一身の上に感見する事が出来るのであります。然

るに吾が現在の日常生活の實際はどうであるか。噫々 吾が此身は如何なる煉獄に陥るにも此如來の大慈恩に聊か酬ゆる處なかるべからずと覺悟はしても力足らざるを如何せん。譬如來大慈父の御前にひれ伏して慚謝し救護を祈念する外ありません。總ては如來の御計らゐに御任せする外ありません。生も死も成も敗も。此んな事を書き續けては際限ありませんから御迷感を想ふて是で擲筆致します。何卒不相變深厚なる御教導を切に御願申上ります。例の如き亂文筆幸に御宥恕御判讀を願上ります。奥様へどうぞ宜敷願上ります。拙家内も宜敷加筆申出しました。本年は其中に是非御目に掛り度と思ひます。御繰合下さいまして、當地御巡教は願はれますまいか。拙家一同は至つて平安無事に暮して居りますから御安神下さい。日として御噂せぬ時はありません。孫も一女一男共に健全であります我々一身の信仰に付ては決して御心配下さいません。御蔭様で進歩は鈍くとも少々宛なりと向上しつゝあると確信して居ります。(土屋上人様)

大正十三年四月二十五日夜

道の本源に歸れ

寛子

七月一日 嗚呼此の日こそ日本人の永久に忘るることの出来ぬ一日だ。吾世界の人類よ心にしかと記憶せよ。吾人の目醒むべき日だ。反省すべき日だ。佛陀の慈悲と基督の愛を忘れた科學萬能の現代人は野獸の如く酒池肉林に足を踏み入れ正義人道自由平等を口にしながらも尙不正義不平等の溝に墮ち入りて出づべき方法さへ忘れたり。此れは唯に今現はれた實例米國をのみ指すにあらずして現代人はあまりに血迷つてゐる。吾人はすべからく反省し道の本源にまでかへり靈泉の清き水をくむべきのみ。從來考へられてゐた如き宗教眞實の果實を取りて我れを養ふべきである。今の如く佛を失ひ神の名を汚し憂世の中に唯浮き浮きと薄氷の上を平氣で渡つてはもうおしまひだ。かゝる有様の現はれば尊き生命を平氣で捨てる忘恩者か。然からざれば希望もなにもなき徒食家である。かゝる集りは死の世界だ惡魔の住む地獄だ。吾人は

これによいとはどうしても考へられぬ。光明の世界を望む吾人ではなかつたか。汝は一切の衆生とよろこびの歌を歌ふ詩人ではなかつたか。暗黒のをさらひ不便利なことを氣にしてゐた大發明家で世界なかつたか。徒らに血迷ふてゐてはならぬ。内からの大なる聲が汝の耳に聞えるはずだ。あまりに汝は急がしい。而も不急のことにさばぐのか、靜になれ。靜にならう。じつと大地の上に立ち希望の星をながめよ。月なき夜なるが天上には星が輝やく。四面楚歌の聲の巷なりとも永劫に失せざる天上の星あり。汝は汝の中に納む所の佛陀あり。萬人に通ずる靈の泉まで掘りに掘りて慈悲のうるほひを見出せよ。その吹出す靈泉の清水こそ人類を生かすものである。誰が彼れがと云ふまへに私がそしてあなたが掘り出させよう。責任は私とあなたである。恐れるな。驚ろくな。必ず世界の人類をして本源に歸へさす。この本源に歸へさんとするの運動これこそ眞生の歩みの第一歩である。眞生のこの道は實に狭い、そして白道であるのだ。たとへ群賊争ひ來りて引きかへさんと呼ぶ

も此の道を吾人は渡らなければならぬ。貪瞋の水、火競ひ漫かせども渡らねばならぬ。吾れたとへ苦毒の中に入るとも此の言を叫び此の實行に入らなければならぬ。七月一日東洋民族の目醒むべき日だ。此の日を期して吾人は互に相携へて胸より胸への運動を試み大いに眞生の白道に進む道友を誘ひて大運動を起さざるべからず願はくば人類の最高理想に突進せらるゝ道友よ團結して大なる靈泉を掘るために努力せられんことを。今の今日醒めずんば永久に地獄の生活に入るか修羅の巷には迷ふのみ。

眞實の宗教

念阿彌

如來様の御慈悲ばかりを喜んで自分の爲すべき道さへも、かまはないやうな信仰は未だほんとうのミオヤの御慈悲が判つた信仰ではありません。そうして又そんな安價な信仰では到底私共の心も満足するものではありません。

尤も如來様の御慈悲は無限の大慈悲であらせま

すから、罪を犯したものは救はないとか、愚かなものはしらないとか、そんな小さな御心ではありません。然ながら如來の大慈悲は私共が如來様の御慈悲を喜んでおればそれだけで満足し給ふやうなものでありませうか、又如來様の御慈悲に救はれたといふ私共の心としても、朝な夕な偏に其の御慈悲さへ喜んでおればそれで一切が満足せられ得るものでありませうか。

靜に思へば、如來様の慈悲はそれらの救ひの喜びよりも尙更に一步を進めて、前にも勝したる向上の一路に自己の生活を進むることこそ、眞に御喜び下さるものでありますまいか。又之を私共の立場から見ましても、私共の本心の願ひはたとい死刑に處せられても、眞に一步でも眞實に生きるといふことが私共の願ひであります。従て眞實の宗教は如來様の救ひにかこつけて、自分の爲すべきことも爲さないやうなそんな責任忌避の宗教ではありません。そこには無限絶對の如來大悲の救ひの裡に、小罪をも犯さじとの覺悟を以て天地の大道を實現するの宗教であらねばなりません。

吾朋便り

●高崎 大塚ひさ子様より。

先生私は只今五月號の最終まで讀生花の指南に何事も念佛の中の仕圓平寺様より甘圓お預りいたしまして參りまして計らすおなつかし事です者楽しい事です。ほんとうにした病間を利用して讀書したいかい御言葉を拜しました。そうして人世の樂さを知ると共に何して病ら上人から適當の本を御見立てのすぐに何の準備もなく何の遠慮も氣くらいにまけて居れませう。一上送つて下さいとの事です。

分で此手紙を書きました。又先生活を望みど力と喜びの理想まで進六日付お便り涙ぐましい程に難有と一心同體であられる奥様にも御まねば人間と生れた價值はない事く拜讀致しました。あのお文中に目にかゝり度いものだとしみじみになりますから自、分を反省する「私が此世を去つた時獨りあなた人をおつれた事につき色々の感大なる眞實の理想に生なくてはな姿が靜に思い浮ばれてしみ」と想を甲上て御指導を仰ぎ度いと思ひません。かうして念佛の尊さが喜ばれる時があるのかさえ思出ふて居ります。又私の心理私の態ハッキリと身に感ずる事のできるされて歩いたのでしたのに「一度に就き御批評を伺い度いとも思ひません。様になつたのも御上人様があれだと一際星の夜の光景が難有く深くふて居りました。それは又何れ申こそと決して御恩は忘れません。感せずにはあられません。私にも上る事にいたします。

●尼ヶ崎 圓平寺様より。

●佐屋にて神谷善之進様より。あ夜の事が如何にもお親はしい感がして……お幼少の頃父上の

お爲めにお願をたてなされた云々として座禪の皮を學びました。十分が向かなくて毎晩蚊に喰はれ作ふ信仰の若い芽ばえを、それから一日の朝俄に歸宅致しました所から書かうかと起きてゐてつい失北斗の星に就ての物語り……今現二日突然Iさんが訪ねられました敗しました。誠に濟みません。そにお上人の御幼少の頃のおもかげ「君に頼みたい事がある私の兄のれといふのも餘り色々な事下手がうかばれて居ります。一ヶ月に家に病人がある處で私が念佛を勧出して念佛が足らぬから筆が重く近いお傳道からお歸りになつて美めて家中が念佛申て居るけれどもなるので御座います。此後は努め智子様のお喜びの様子から良子調子が取れないから導師になつてお念佛に入るやうに心掛けます様はお小さいながらも抱き心地貰ひたい」との事で私も修養の出又今から拙宅の幼稚園も七十名をはお存じですぐとお父様の氣分を來る事と共に参加して念佛を收容して斷りきれぬ盛況ですが不お受けになる事と思ひます。おかせて頂きました。最初Mさんに頼まれた先生の爲めに胸を痛めてあげと私の一族も丈夫に暮して小猫「頼みました」との事に私が引張り「努めさせて頂きます。」一匹入江から貰つて來て幼いもの頼みなさい」との事に私が引張り「努めさせて頂きます。」

▲氣分が漲つて居ります。

出されて役に立てて頂きました。●大阪 杉山喜三郎様より。

●佐屋 黒宮平八様より。病人の工合も大變よろしいもて十丁度十八年振りにて私としては珍お上人様に離れて何となく淋しく三日又下さんが迎へに來て下さいしく最も病氣に付一切は生治醫に唐澤での拜顔を今から楽しんで居ましたので今日はE子さんと私と任かし静臥に務め申候へ共忘想安ります。出來る事なら時々位はおで参りました。皆眞劍に申されま念は容赦なく起り來り養生に益な便りを願いますよ。

●岐阜 松浦重三様より。

●津島 中野尅子様より。名一念より十念と苦痛の中に及ぶ修善寺滞在中は多く修善寺に遊び原稿をと思つて居り乍ら仕うも氣丈け連續に務め申候所割合に安泰

に意外に速く回復期に達し候様に見て直御手紙をさし上げやうと致れないものごてはありません。而感せられ全く慈光の尊さに深く感しましたが例の不性が出まして御も靜に思ひめぐらせば實に千古の銘致し居候云々。

●函館 堤清治郎様より。

あんなりながら御無沙汰に打過様で御來柏下さいましお待ち申上い因縁の結ばれてゐるといふことぎ御手紙を差上る勇氣も失せて反ます。(美和子へ)

●東京 土屋觀道より。

何の意味もなしに只々習慣的に御只今一人では眞生の原稿をやつ親子にも勝る親しみの友なるあり無沙汰をしたのみの事ですから何と整理した所であります。而て私或は眞の兄弟にも過ぎたる友道のうか悪からず御許し下さい。實はの三疊の書齋で獨り淋しくも亦懷懐かしさを結ぶと云ふことは思へもう三四日するとカムチャツカへしく皆様を思出してゐるのです遠ば思ふほど寧ろ感激の涙であります出稼せねばならんで漸く筆をどきは昔の幼な友達より近きは昨夜す。其他如何なる不幸にや計らざる氣になりました。久しく無音の千葉の松戸で御目にかつた道友も自ら縁遠くなり行く人もありまお詫に併せて御送下さいました眞の方々に至るまで皆一として私のすが、靜に人生の行路を想ふて過生のお禮をして逃げるやうに彼地心に思浮ばれぬものごてはありまざし昔の親しかりしことなど思出へ左様ならしたいのです。

●越後 原とみ子様より。

御一家のことは忘れ様とて忘れるては道を求めて共に悩んだ道友の私は今も尚昔に勝りて君の高恩を事が出來ぬのであります。先日も人々、或は學校を出てからの友の謝せざるを得ないので。オウ君御一同様で御來柏下されたゆめを數々、一として私の心に思ひ浮ばは私を離れて何處に行かうとする

のであるか、三界は我有、其の中ころの心の友よ、私はあなたの衆生は我子であると宜し給ひし爲めには此の身と心とのすべてを

寄贈並誌代拂込芳名

釋尊の心に歸れば我等は本來如來 献げても惜くはありません。否、

の御子であり、又我等はお互に兄 惜いごころか私は喜んであなたの弟姉妹であつたではないか、否單 爲めに献げます。否私共は已にか

寄贈之部
○金拾圓神戸關市恒子様函館堤清次郎様

にそればかりではない己に是の無うして、お互に相献げてゐるので

誌代之部

○金拾圓神戸鶴田昌造様扱○金壹圓神戸安藤様○金壹圓五十錢本間榮吉様○金壹圓大谷象平様大矢知友右衛門様小美濃ゆい子様吉水辨道様○金壹圓貳拾錢黒野智山様

限宏大な時間と空間とに於て少くすはね、私は今あなたの心からなとも我等は一體であり不二である御心に對して無限の感謝と敬意而も斯うして、相會し相語るえにとを表してゐることを御許し下さしを得たといふ事は單にそればかり。

りでも謂知れぬ吾々の喜びではな オウほんどうに懐かしい私の兄弟たちよ！ 願くばどうか私の至

更らに私は親身も及ばぬ友の心らない不徳をも許して私と俱に如に感謝せずにはゐられない。私と來を中心とした向上の一路に立て共に悲み私と共に喜んで下さると下さい。(六・一六・午後五時)

唐澤の三昧會

七月 自二十二日 七日間
至二十八日

今度こそは一層清淨な心でやりませう。御参加の方は々前にて御一報下さい。

注意 二十、日夕方までに集り二十九日解散會の事
訂正 先月の豫告二十三日開會は二十二日の誤り

定價一十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
編輯兼 土 屋 觀 道
發行人 眞 生 社
發行所 眞 生 社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
印刷人 三・井 清 次
東京市芝區三田四國町 番地三號
印刷所 玄々堂印刷所

に意外に速く回復期に達し候様に 見て直御手紙をさし上げやうと致れないものとはありません。而感せられ全く慈光の尊さに深く感 しましたが例の不性が出まして御も靜に思ひめぐらせば實に千古の銘致し居候云々。

●函館 堤清治郎様より。

あんまりながら御無沙汰に打過 様で御來柏下さいましお待ち申上

ぎ御手紙を差上る勇氣も失せて反 ます。(美和子へ)

は思へば思ふは懐かしさのきはみであります。或は因縁深うして

て思ひ乍ら缺禮を重ねました別に 只今一人では是の眞生の原稿をやつ 親子にも勝る親しみの友なるあり

何の意味もなしに只々習慣的に御 只今一人では是の眞生の原稿をやつ 親子にも勝る親しみの友なるあり

無沙汰をしたのみの事ですから何と整理した所であります。而て私 或は眞の兄弟にも過ぎたる友道の

うか悪からず御許し下さい。實は の三疊の書齋で獨り淋しくも亦懷 懐かしさを結ぶと云ふことは思へ

もう三四日するとカムチャツカへ しく皆様を思出してゐるのです遠 ば思ふほど寧ろ感激の涙であります

出稼せねばならんで漸く筆をと きは昔の幼な友達より近きは昨夜 す。其他如何なる不幸にや計らず

る氣になりました。久しく無音の 千葉の松戸で御目にかゝつた道友 も自ら縁遠くなり行く人もありま

お詫に併せて御送下さいました眞 の方々に至るまで皆一として私の すが、靜に人生の行路を想ふて過

生のお禮をして逃げるやうに彼地 心に思浮ばれぬものとはありま ざし昔の親しかりしことなど思出

へ左様ならしたいのです。

せん。幼なかりし古里の竹馬の友 れば一層深い昔のまゝの懷さをさ

●越後 原とみ子様より。

或は望みに輝いた學友の一人、さ へ思い出づるのであります。而も

御一家のことは忘れ様とて忘れる

ては道を求めて共に悩んだ道友の 私は今も尙昔に勝りて君の高恩を

事が出来ぬのであります。先日

も人々、或は學校を出てからの友の 謝せざるを得ないので。オウ君

御一同様で御來柏下されたゆめを

数々、一として私の心に思ひ浮ば は私を離れて何處に行かうとする

のであるか、三界は我有、其の中ころの心の友よ！、私はあなたの衆生は我子であると宜し給ひし爲めには此の身と心とのすべてを釋尊の心に歸れば我等は本來如來 献げても惜くはありません。否、の御子であり、又我等はお互に兄 惜いごころか私は喜んであなたの弟姉妹であつたではないか、否單 爲めに献げます。否私共は己に制限宏大な時間と空間とに於て少くすはね、私は今あなたの心からなとも我等は一體であり不二である御心に對して無限の感謝と敬意をも斯うして、相會し相語るえに とを表してゐることを御許し下さしを得たといふ事は單にそればかりい。

りでも謂知れぬ吾々の喜びではない。 オウほんどうに懐かしい私の兄弟たちよ！ 願くばどうか私の至

更らに私は親身も及ばぬ友の心 ならない不徳をも許して私と俱に如に感謝せずにはゐられない。私と 來を中心とした向上の一路に立て共に悲み私と共に喜んで下さると下さい。(六・一六・午後五時)

唐澤の三昧會

七月 自二十二日 至二十八日 七日間

今度こそは一層清淨な心でやりませう。御参加の方は々前以て御一報下さい

注意 二十 日夕方までに集り二十九日朝散會の事
訂正 先月の預告二十三日開會は二十二日の誤り

寄贈並誌代拂込芳名

寄贈之部

○金拾圓神戸關前恒子様 函館堤清次郎様 二十圓

誌代之部

○金拾圓神戸鶴田昌造様 坂○金壹圓神戸安藤様○金壹圓五十錢本間榮吉様○金壹圓大谷象平様大矢知友右衛門様小美濃ゆい子様吉水辨道様○金壹圓貳拾錢黒野智山様

定價 一圓十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 土 屋 觀 道

發行人 眞 生 社

發行所 眞 生 社

東京市芝區三田四國町三番地三號

印刷人 三 井 清 次

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所 玄々堂印刷所